

空を

**姨捨** おばすて

(長野県千曲市)

千曲川沿いで雄大な長野盆地が広がる。その南端、古くは古今和歌集に詠まれた名月の地、「媛捨」に元禄22年5月、月夜に渡わたった。山の尾根に浮かぶ月は、圧倒的な大きさで、明るさは、月よりも近づいた時の満月よりも遙かに大きい。

巨大な十四夜月が現れた。月のでしょう  
が地球に最も近づいた時の満見事な畠田を守っている森  
月「スーパー・ムーン」を題名 正文さん(?)は、この月の下  
に憩えた夜。山の屋根に浮かびで生きてきた。  
ぶ月は、圧倒的な大きさで明

代藩が、将軍の徳川家に刃向かう意思のないことを示すため、武芸ではなく能を奨励した。その伝統という。

の悲しみを与えた色、リズムだった。

おでこに、  
どう表すか。感動  
といけない」。声  
に細心の注意を払  
ねつ更級や、娘捨



## 美景 数々の歌枕に

「姨捨」は一般的に、長楽寺周辺から広がる約60戸の範囲を呼び、中心となる棚田は近くの7集落の農家、約150戸が所有する。

古来、名月の地として歌枕になり、多くの歌や句に詠まれた。松尾芭蕉が訪ね、「更科紀行」を記したことでも知られる。平安時代の大和物語に見られる姫捨伝説は、善光寺が近く仏教が盛んだったことなどから、文学と共に広まつたと考えられる。

棚田は戦後の荒廃を経て、約18年前に復活。希望すれば地元有志で作る「楽知会」(亀山さん方。026・274・0572)が案内してくれる。

おもむろに、中井が「おまえが父と  
おなじだ」といふ。中井は驚いて立つ。  
おにぎりの農業の収穫を就け、朝日  
を愛する娘だ。娘の夫は、中井の娘の夫  
勤め詰めに勤め、中井で、仕事  
以外に楽しめたのが詰めだ。  
江戸時代、この地を治めた松  
選か。いわゆる「おもむろなから」だ。  
また、おまえの父は、中井の下に居た  
おじの妻東の老女の母は、中井の妻の  
娘にならう。最後に、「殿様」  
かね（恩めらなれど）  
抱き合へられた娘が、もしも子供  
が出来た場合、いわゆる「おもむろなから」だ。

「ナニに付わる」 梶田を管理する「名月会」の会長だ。

それぞれに月が映る「田毎の月」を作る。

「續いていた」冬の手がひび  
やあかぎれで顔紅、それでも  
泣き言つてゐない、聴き入  
った。それがやめ、「疲れた  
」と婆ひながまほ、あつけ  
長年の練習で若手に教えて  
た。地元の祭りや宴會で小説  
を披露することが「一人前の  
女」のたしなみなどされて  
きたからだ。

冠着山、別名「娘捨山」のふもとに約40枚、1500枚。農耕地としては初めて国

さういふなかで、たその無む心じんなことを、心残りを「聞く人が共感していくようだ。」と評するようだ。

「娘捨て説」が残る。本當にあつたのか。いや、寧ろそれが戒める仏教經典が伝説を生んでゐる。由来はいのうしながり身に着ける。どんな状況、どんな思想の場面か。解釈しただけでは物語の真意を述べる。讀解だからこそ、その趣意。

当日、母の面影が浮かんで消えた。農作業と子育てだけはすでに母の年を超えた。生

先生が死んでいた。この月の下で生きていきた。  
武芸ではなく能を奨励した。その伝統といふ。  
中世の書物で書かれた「羅城記」を見ながら、決められた本題や音韻を先生のまねを

色、リズムに細心の注意を払つた。  
「感めかねつ更級や、  
山の夕暮れに、  
棚田に面した場所で語つた

# 名月の地

も、ひとのわ長く重い。  
仕事を終えて一時間、図の  
仲間が集まり、物語を学びな  
がら練習を重ねた。「夕暮れ  
時の寂しさ、わびしさ、老女の  
の悲しさなどをどう表すか。感動  
を与えないといけない」。声を